

水車小屋のオルゴール

2020.10 ゆきや

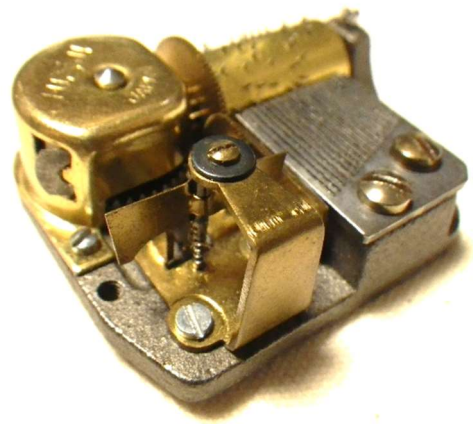
おばあさんから貰った思い出いっぱいのオルゴールだそうです。全体が木彫の民芸風の作りです。水車を回すとねじが巻かれ、右側にある宝石箱を引くと鳴りだす仕掛けですが、水車はカラカラと、空回りするばかりです。

最悪の場合、2,000円ほどかかるかも知れないと、了承いただいて、お預かりしました。



ムーブメントを外してみました。古典的な、ちょっと変わった作りです。

ゼンマイを納める香箱にFUJIと刻印がありました。



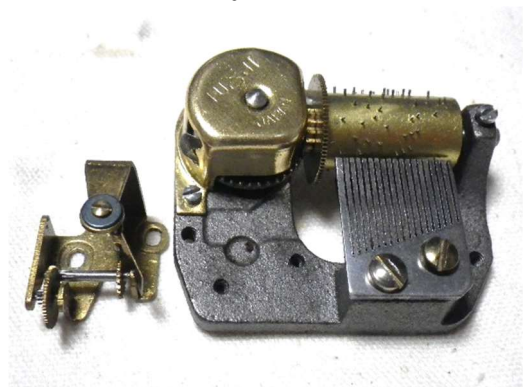
物の本によれば、日本では戦後にオルゴールが量産されるようになります。その最初は昭和22年の「東京オルゴール」、次いで23年に諏訪の「三協精機」等続々と誕生し、昭和30年までに20社ほどになったという事です。「FUJI」もそのようなメーカーの一つで、昭和24年に静岡で設立され、もともと盛んだった木工業と手を組み、沢山のオルゴール付き宝石箱を生産しました。その殆どがアメリカなどへの輸出品で、日本を強くイメージさせる、「富士山」や「五重の塔」などの図柄で、また朝鮮戦争から復員する米兵などが、東洋のお土産として、大量に購入していったとも伝えられています。

この水車小屋も、そんな時代の中の作例だったのかも知れませんね。今、静岡県清水市で手作りの木のオルゴールを製造している「東洋音響オルゴールゆめの木」がその「FUJI」の流れを汲んでいるという事です。

近年のムーブメントは、ゼンマイのカバーも、调速機構も一体で台にカシメられています

が、このオルゴールでは、いずれも別々で、ネジで留められています。量産化が進む前の型だったのでしょうか。ゼンマイのカバーもネジ留めで、簡単に外すことが出来、その結果ゼンマイが切れている事が分かりました。

それも、不運な事に全長のほぼ半ばの所で切れていて、これでは、引き伸ばしてダマシダマシで再利用する事も出来ません。



また手持ちのゼンマイを使えないか比べた所、幅がおよそ1ミリも違う事が分かりました。奥側が今日のゼンマイ、手前が今回の切れたものです。

ここまでで、このムーブメントを再生させることは諦め、新しいムーブメントに取り換えることにしました。問題は曲名が分からない事です。依頼人の方も、曲名の記憶はないという事でした。

初めの内は、水車小屋だから「森の水車」辺りかなと、安易に考えていました。何度も何度も、ドラムを手で回しながら、曲の再現を試みました。(指先の痛い作業です) その結果、浮かんできた曲のイメージは、なんと「エリーゼのために」でした。



水車小屋とはあまりにもかけ離れた曲で、そのアンバランスに信じられない思いでした。念の為、家の者に聴いてもらっても、「エリーゼ…」に違いないという事です。依頼人の方に再確認しましたが、記憶になくイエスでもなくノーでもないという事でした。

ただ、先ほどの、この時代のオルゴールの歴史を思い浮かべると、水車小屋という日本的な外観と、ベートーベンの名曲、西洋音楽の粋の組み合わせもあり得たのかも知れませんね。なんとか得心して、「エリーゼの…」のムーブメントを発注しました。

新しいムーブメントは、ネジの位置をちょっと変えるだけで取り付け出来ました。問題は水車でした。

F U J I 製は、巻ネジが細く、水車のネジも、今日のものには合いません。(写真 手前) 試案の結果、手持ちの長い巻ネジから、手作りしました。(写真 奥) 巻ネジにφ2ミリのネジ穴を切り、廃物のコンセントプラグをネジ止めしたのです。



こうして水車小屋「エリーゼ…」のオルゴールが復活しました。

おばあさんの思い出が、たくさんたくさん蘇えってくれ
ると良いのですが。

以上